

なかにし ひろゆき
中西 博雪さん

砂山町第3自治会長・砂山三友会街路樹愛護会 会長

●浜松らしいメリハリのある都市計画を！

昭和40年代に浜松に来て、まちの景観がバラバラで洗練されていなかったことが、非常に印象的だった。今でもその状況は変わっておらず、静岡市と比べても都市の顔として不適當である。

浜松まつりでは、みんな自分たちのまちに誇りを感じているのだから、幹線道路沿いなど、景観に関する規制を強化することで、市民が自分たちの住む浜松に誇りを持つまちづくりを進めてほしい。

また、浜松南部は津波被害が懸念されており、現状を見ても、新規の開発や発展は難しいと実感している。

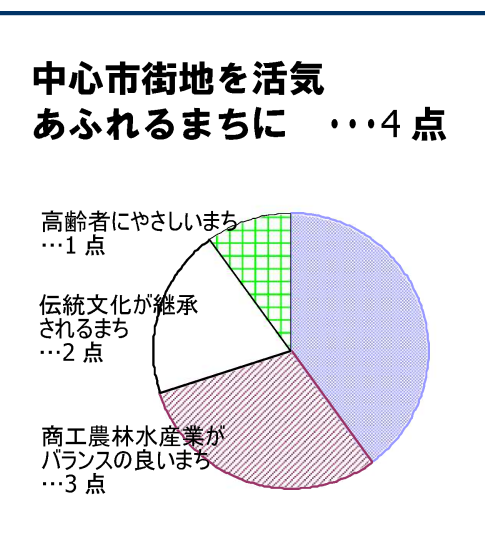
30年後を見据えれば、三方原台地から金指までのエリアに、産業や住居の開発を誘導するような政策を展開してはどうか。

●人が集まる中心市街地を！

市民にとって思い入れの深い松菱が破綻して随分経つが、今の空き地の状態のままでは、発展が望めず市民全体が心配している。また、中心市街地の商店街は跡継ぎもおらず、独居の高齢者が住むシャッター通りとなっており、新しい取り組みの提案にも消極的である。

景気がなかなか上向かない中、中心市街地を活性化するためには、人が集まる仕組みをつくることが何より大切である。人が集まれば商業も自ずと活発になる。

市民が楽しむ場所を設けるため、例えば中心市街地に演舞場等を新設してはどうか。また、それとともに、駅と舘山寺、三ヶ日などを循環モノレールで結び、公共交通機関の利便を向上させ人々の移動を活発化させてはどうか。



【浜松市への期待度グラフ】

●教育・スポーツの充実を！

近年、自治会活動などを見て、利己主義の人が増えたと感じる。

不景気の中、給料が伸びない一方で、子育てにお金が掛かり過ぎ経済的な余裕がないことで、家庭教育に悪影響を及ぼしている。学校教育においても保護者の不信感が高まるなど、将来を担う子どもの教育を見直す時期に来ているのではないか。

スポーツは体を鍛えるだけでなく、礼儀を学び他者とのコミュニケーション力を高める良い方法であるため、教育の場においてもスポーツを盛んにしてはどうか。また、スポーツを通じて浜松を有名にするため、全天候型のドームを整備してはどうか。

なかむら しんじ
中村 新治さん

在浜松ブラジル総領事館勤務

●海外へ浜松市のアピールを！

浜松市は大都市圏の真ん中にある。東京や名古屋などへのアクセスが有利で、富士山静岡空港も近くであり、海外への渡航も簡単。浜松市をもっと海外へアピールできれば、外資系の企業も増える。企業の職種が広がることにより、高校・大学もより専門的になる。そこから若者が増えることになり、まちなかの活性化に繋がるものと考えます。

●浜松まっりの引き継ぎ！

まず「浜松まつり」に驚いた。今まで住んでいたまちにはない、まちぐるみで一体感を持って参加のできる伝統的なまつりである。子どもから大人までの市民が全員で参加し、見る人・参加する人が全員で楽しんでいる。地域の子どもにも浜松まつりへの熱意が引き継がれているので、30年後にも伝統文化として残っていることを期待したい。

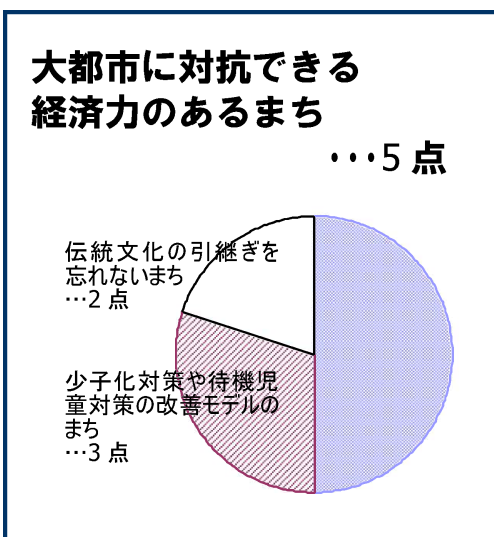
●コミュニティへの参加を！

町内会などのコミュニティへ外国人があまり参加しない。日本語が苦手な人は「自分が日本語を分からないことで、差別されるのではないか」と考え、行事の内容を確認せずに参加しない。回覧文書に難しい日本語が書かれていると、内容を見ずに次へ回してしまうこともある。町内会への参加を促すために、地域に住む日本語・外国語が話せる人と町内会が協力できれば、外国人がコミュニティへ参加しやすい環境が作れる。

また、子どもを通じて情報を伝える方法がベストだと思う。「子どもが賞をとったのでぜひ集まって。」と親を集めて、一緒にパーティを開いてしまうのも良い方法である。こうした小さなことからコミュニティへの参加をするのが良い。



【中村新治さん】
ブラジル総領事館のネットワークを活用し、積極的に浜松市のアピールを行っている。



【浜松市への期待度グラフ】

●子どもに安全な公園を！

子どもが一人で安全に遊べる公園が少ない。公園への道路が狭く、公園の遊具が老朽化していることがある。私自身、子どもを連れて大きな公園へいくことが多く、とても不便を感じる。今まで住んでいたまちには近所に子どもが一人で安全に遊べる公園がたくさんあった。そんな公園を浜松市が設置・整備し、親子にとって住みやすい環境をつくってほしい。

なかむら みえこ
中村 美詠子さん

浜松医科大学健康社会医学准教授

●高まる「食」の重要性

浜松医科大学で疫学、公衆衛生学を専門とし、また自治体からの受託事業等にも関わり、大学の知を地域に還元している。時代の変化に対応し、精神的健康、社会的健康に対する健康づくりや、学校・産業・地域が連携した保健活動を模索する。

超高齢社会を迎え、単身世帯が増加する中、「食」の有り方が難しくなっている。地元浜松の農・漁業をこれまで以上に活用した健康的な食の展開が求められる。



●自然と共生し、歴史を活かしたまちづくりを

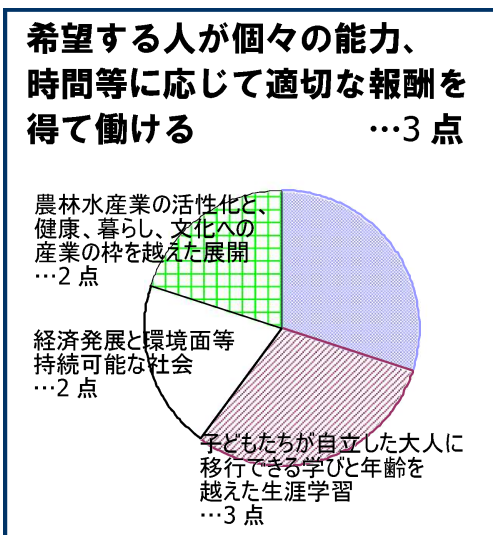
大学進学を期に横浜から浜松に来て、それ以来本市に住んでいる。ものづくりに支えられた文化や、自然豊かで食材に恵まれ、医療体制も充実しているなど、住みやすいと感じる。中でも、浜松に来て印象に残っているのは、水道水が美味しいということ。また、空気が澄んでいて、星空もきれい。今後とも豊かな自然との共生を持続していきたい。

一方、中心部に関しては、“まち”としての魅力に乏しく、“まちぶら”ができない。バスも浜松駅を中心に放射状に伸びており、横の動きがしづらい。自家用車を持たないと生活の利便性が低下する。“肴町”や“鍛冶町”など、歴史を感じさせる町名も多く、歴史のある都市として、それらを活かしたまちづくりを期待したい。

●緩やかな人々の結びつきが必要

義務教育においては、学校、教師が“わかりやすい評価”を求める傾向にあることを危惧している。普通から外れる子、目立たない子を、温かい目で見守り、支え、育てくれる教師は貴重な存在であるが、学校内外で評価されにくいのではないかと。このような現状を変えていく取り組みが何かできないか。働き方、学び方を含めた生き方の多様性を可能とし、認める社会になることを願う。

また、これからの社会では、上の世代と同じような地域、家族の関わりを求めることは難しいと感じている。地域でも家族でも、それぞれが社会の構成員であることを実感できる、緩やかな人々の結びつきが必要となるだろう。



【浜松市への期待度グラフ】

なかむら ゆきこ
仲村 由紀子さん

浜松市食育ボランティア・ハートフルみどり会長

●食育を通じ、伝統文化を伝える

食育ボランティア活動に携わり約 30 年。現在、市内協働センターにある食育ボランティアの連絡協議会の代表をしている富塚地区では、30 名が子ども、親子、高齢者を対象とした料理教室の講師を務めるなど、食育を通じた伝統文化を次世代に伝える活動を行っている。食育の大切さは年齢を重ねるとともに実感し、分かってくるもの。若い世代が栄養バランスのとれた、日本特有の食卓を提供するなど、我が子に食育の大切さを伝えていってほしい。



●一人暮らしの高齢者世帯が孤立しないために

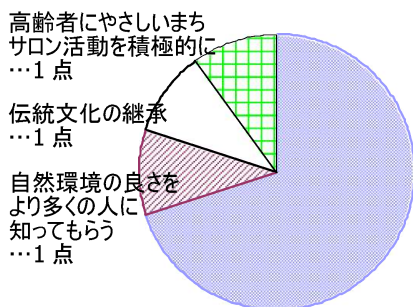
食育ボランティアのほか、民生委員、保護司などを務め、最近、地域に空き家や一人暮らしの高齢者世帯が増加していると感じる。一人暮らしの高齢者は今は自立し、しっかりとした人も多いが、人と人との出会いの大切さを感じ、高齢者同士が交流できる暮らし方が増えれば、孤立しないようになる。また、ボランティア活動や各種活動の担い手がいらないのも、最近の悩みのタネ。若い世代が仕事や育児で追われていて、余裕がないのは理解できるが、地域の活動にも目を向けてほしいと感じる。

●駅前に高齢者が買い物できる場所が少ない・・・

一昔前の浜松駅前には、松菱、西武などの百貨店があり、買い物に行くなら駅前が当たり前だったが、現在はまちなかに出る機会がほとんどない。高齢者が買い物できる場所も少ないと感じる。青少年育成センター補導員として、まちなかで若者をビシビシ補導していた頃もあったが、最近では、若者を見かけることも少なくなっている。中心市街地の活性化と、まちなかへ向かう交通網の整備について真剣に考えていかなければならない。

中心市街地の活性化と 交通網の整備

・・・7 点



【浜松市への期待度グラフ】

●将来を担う子どもたちのために

私たちが育った時代は、親以外にも教師、地域の人たちが、地域の子どもたちを厳しくも優しく接してくれた。

食育ボランティアなどの活動を通じて感じるのは、最近の子育て世帯は、共働きも多く、母親たちが大変忙しいということ。時代の流れなのかもしれないが、時には我が子とじっくり話したり、抱きしめてあげたり、深い愛情をもって接してほしい。

将来を担う子どもたちが、心身ともに健やかに育つことを願う。

なかやす ちあき
中安 千秋さん

なかやす牧場

●何でもあるまち、浜松

浜松市は温暖であり、海の幸かや山の幸まで食べ物は多種多様でどれもおいしい。自然環境だけでなく、ちょっと出掛ければショッピングセンターもあり、買い物にも困らない。住みやすく、何でもあるまちという印象である。

●その浜松にないもの

浜松市は工業も盛んであり、働く場所にも困らないため、若者も多い。ただ、私の娘は東京でファッション関係の仕事をしており、浜松にはそのようなクリエイターが働く職場が少ないように感じる。かつては織物のまちとして栄えた浜松市であり、これほど住みやすいのだから、ファッションデザイナー等のクリエイター育成に力を入れれば、新しい産業の発展も可能性があるのではないか。

●モノの買い方が変わってきている

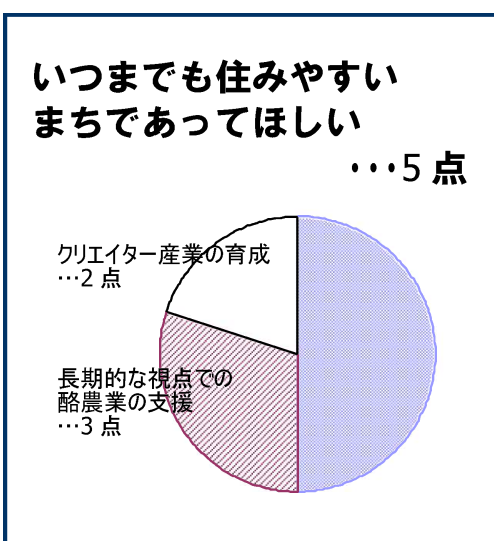
これまでは、商品の卸を中心に行ってきたが、知人からウェブデザイナーを紹介され、今年からインターネット通販も始めている。若い世代の方はインターネットでの買い物に抵抗がないように感じるし、新東名が出来てからは特に遠方からもお客さんが来てくれる。そうした人が、商品を気に入ってもらえれば、地方発送という手法も効果的と考えている。

●何事も気遣いが大切

第1次産業は臭いの問題など、近隣のつきあい方が難しい。こちらが先に住んでいたのだからといった姿勢でなく、お互いに気を遣っていければ、共存も可能である。また、商品開発でも、お客様が本当に欲しいものに気づき、見極め、つくってあげれば、値段で勝負をしなくても、気に入ってもらえる。



[中安千秋さん]
自然に逆らうことなく、長い目で成長できる酪農施策が必要と語る。



【浜松市への期待度グラフ】

●自然に逆らわない酪農をしたい

食の安全が注目されるようになった影響なのか、出荷する牛乳への基準も規制が高まっている。安心で安全な食品を提供するのは当然のことではあるが、供給者サイドの視点では疑問を感じる規制も存在する。求められる基準を満たすため、暑さが苦手なホルスタインに対して夏に無理をさせ、乳牛としての寿命を縮めてしまうこともある。ホルスタインの特徴をしっかり説明すれば、消費者は年間を通じて牛乳の質が変わることも理解してくれると信じている。そのような自然に逆らわない酪農をすることで、長い目で見たら、酪農の発展につながっていくのではないか。

なかやま あきひと
中山 彰人さん

浜松倉庫株式会社 代表取締役社長



●ニッポンの中心にある都市、ハママツ！

浜松は、雪が降らないことなどの気候面や、東京と大阪の中間であり、高速道路・鉄道などの交通の便が良いことなど、物流業にとっては非常に条件の良い立地である。

●何でもそろっていて「特色」が出せない！

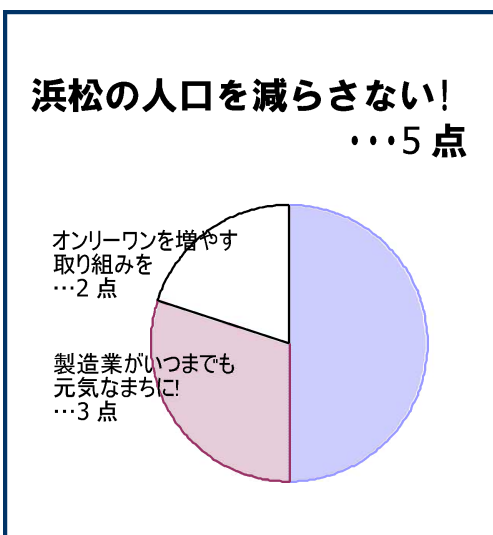
浜松市は繊維産業、楽器産業、自動車産業と、技術の発展に伴い新たな基幹産業が生まれてきた土地である。館山寺などの観光地もあり、農産物も海産物も高品質で種類も豊富である。しかし、贅沢な悩みでもあるが、逆に何でもありすぎて「浜松の特色」が出しづらいのではないかと？ 行政も様々な産品をプロモーションしているが、その影響で「浜松といえば〇〇」といった代表格がない。日本初となるものができるくらいのインパクトが必要である。

●人の一生が浜松で完結するように

全国的な人口減少を食い止めることは難しいと思うが、浜松もそれにお付き合いをする必要はない。浜松の人口を減らさない取り組みが必要である。ものづくりのまちとして、生活の基盤である雇用創出を優先して行う。また、老後も安心して住めるまちにすることにより、定年を迎えた方々の浜松への移住が期待できる。雇用の充実と高齢者に優しいまちづくりを行うことで、ゆりかごから墓場まで、人が安心して一生を過ごせる浜松になってほしい。

●まずは何よりも製造業！

「ものづくりのまち浜松」をずっと守っていき、更に成長させていくことは、物流業の成長にも繋がる。まずは製造業の成長が優先であり、物流業は製造業を迫っていくもの。県の内陸のフロンティア構想では、物流業にスポットを当てているが、その業界で仕事をしている人間からすると、モノを生み出す仕組みづくりが先ではないかと疑問を感じている。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松版「Amazon」

行政サービスの向上と効率化を同時に進めるためには、中山間地域などで、これまでの「来庁型」の行政から、「訪問型」の行政への転換も一案ではないか。それにより、近くに市役所の機関がなくても市民は不便を感じることはなくなり、ルートが確立できれば、民間による配送事業への展開にもつながっていく。

なすだ まみ 那須田 摩美さん

法政大学地域研究センター客員研究員
まちづくりコンシェルジュ

●浜松マダムに文化的刺激を

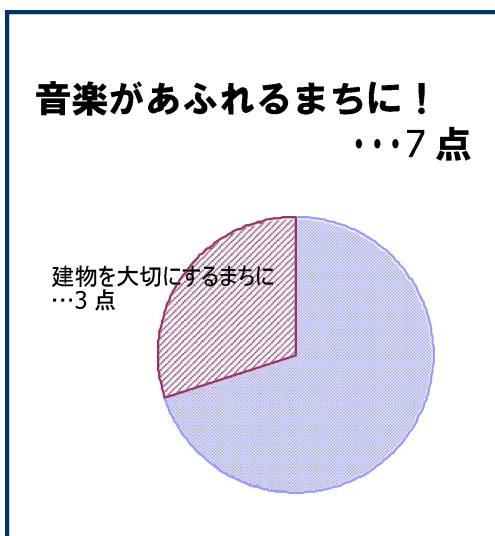
平成 23 年度に舞阪町で、浜松ゆかりの脚本家・演出家・音楽家などとコラボレーションし、シニアと子どもたちによる音楽劇の公演を打つ。地域のイベントで活躍しているのは、いつも同じ人のような気がして、眠れる人材が出てきてくれればという思いから、参加者を募ることにした。それまで、テレビの前でのんびりしていたおばあちゃんたちが、出演者やスタッフとして公演に参加し、生き生きと活動するのを目の当たりにし、地域に根ざした文化活動を展開させていきたいと思った。

昨年度は、まちなかの空き店舗を利用して、日替わりのイベントスペース「まちなかガーデンズ 01」を運営。近年、まちなかに移り住む高齢者が増えているが、病院とマンションの行き来だけという人が多い。そんな人たちが、まちなかガーデンズで文化講座をやっていると足を止めてくれた。

今のまちなかは、夜の飲食街になっており、昼間は閑散としている。しかし、60 年代頃にはお茶やお花の教室がたくさんあった。「まちなかに出て、午前中は教室でお稽古をして、ランチを食べ、買い物をして帰る」のが主婦層の定番パターンだったと考えられるが、今はすべて郊外で完結している。まちなかに若い世代が集まる場所はできてきたが、中高年世代の交流の場がないと思うので、マダムたちがおしゃれをして出てくる場所をつくりたい。

●音楽人口の多さを活かして、音楽のまちづくりに+α

今、浜松では、音楽家のコンサートがたくさん開催されているし、やらまいかフェスティバルやプロムナードコンサートなどの取り組みも素晴らしい。それに加えて、もっと市民が日常的に音楽を楽しむことができれば。浜松には、幼い頃から音楽に親しみ、楽器を演奏する人が大勢いるので、その存在を活かしたい。例えば、素人が気軽に弾けるピアノ喫茶や、いつも生演奏を流している FM 放送局があると良い。浜松らしさを出すことができると思う。



【浜松市への期待度グラフ】



【那須田摩美さん】
大学の研究員として日本各地を訪れる機会も多い那須田さん。浜松では音楽を中心としたまちづくりに取り組めるのが嬉しいと語る。

●古い建物と文化の融合を

浜松のまちなかは、戦後復興をきっかけに建てられた共同建築（隣接する住人と共同で建てたビル）が多いのが特徴。古い建物を壊して綺麗なまちなみを整備する方が良いと考える人もいるかもしれないが、それでは他のまちと同じになってしまう。長い歴史の中で形成されたまちなみだから、浜松らしくて趣がある。多くの共同建築の、当初、居住スペースとして使用していた 2・3 階部分が、今はほとんど空いている。このようなスペースを有効活用して文化的な取り組みができれば面白いと思う。

の ず え よ し こ
野末 芳子さん

株式会社マッキンリー 管理部総務課総務グループリーダー

●ワークライフバランスへの取り組み

1939年創業、今年で74年目のメーカー。ワークライフバランスを取り組むきっかけは、会社の現状として①男性社員が多い②社員の平均年齢が37歳で出産・子育て世代が多い③共稼ぎの家庭が多い、等が見受けられ、男女を問わず子育てしやすい環境づくりが必要と考えたことによる。将来的には、育児休業もさることながら介護休業が重点となると予想している。厳しい経済状況が続く中、未だ取り組み途上ではあるが、フレキシブルな働き方や、女性が活躍する領域をより一層広げていく事で、家庭の安定が仕事への集中に結びつき、ひいては企業としての収益アップに繋がるよう進めたい。

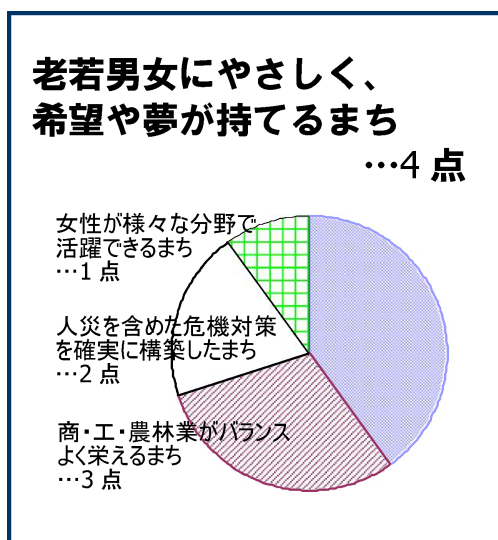


●弱みも活かす発想の転換が必要

製造業のまちとして発展を遂げてきた浜松市であるがゆえ、サービス業や文化・芸術面を楽しむ要素が少ないと感じる。静岡市は商業・文化のまちだが、浜松市は工業都市とまでは言えず中途半端さがある。政令指定都市として今後もっと活性化するためには、地理的に東京・大阪のちょうど中間にある利点や、風光明媚、温暖な自然環境の恵みを活かし、市内外からどんどん人が集う魅力的なまちづくりを推進してほしい。また、弱みを活かす発想の転換や市民同士が積極的に知恵を出し合う必要がある。

●住民の声を聞き、長期ビジョンの策定を

これからの30年は、想像ができないくらいの速さで時代が変化していくだろう。その中で、



【浜松市への期待度グラフ】

浜松市が活性化し進化を遂げていくには、長期ビジョンをしっかりと考えることが重要。長期ビジョンの策定には、関係者のみならず「やらまいか精神」にある前向きな住民の声にもしっかりと耳を傾けてほしい。現在の浜松市は広域で、すべてをきめ細かく管理・把握することが難しいように感じる。区ごとに政策を考えるのもひとつだが、分野（産業、文化、郷土芸能、農業、自然環境など）として整理し、エリア分けすることも時には必要ではないか。浜松で生まれた産業や文化を出来るだけ絶やすことなく守っていくとともに、後世に伝え発展させ、将来的にも価値あるものに育てていきたい。